

韓国降神巫の地域的様相

——憑依霊としての死者を通して——

川上新二

周知のように韓国には、世襲巫および降神巫と称される二種類のタイプの巫がいるとされ、世襲巫とは、世襲によって巫業を継承する巫を、また降神巫とは、神霊が降りること、すなわち神霊が憑依することによって成巫する巫を指すものとされている。したがって降神巫の成巫において重要なのは、まさに神霊の憑依ということであり、如何なる神霊が憑依するのか、すなわち憑依霊の様相を考察することも、韓国の降神巫を研究するための基礎的な作業の一つになると思われる。

韓国の降神巫のなかには、天神、龍神、山神、日月星神などの神々が自分に降りてきたと語る者がいる一方、自分と血縁・姻戚関係にある死者が降りてきたと語る者もいる。本発表は、降神巫の憑依霊のなかでも、特に降神巫と血縁・姻戚関係にある死者に注目し、発表者が実施したソウルおよび全羅南道珍島での調査(拙著『死者と生者の民俗誌』岩田書院、二〇一一)や、全羅南道光州の降神巫に関する先行報告(浮葉正親・小松和彦「韓国全羅南道K市における巫俗の受容」佐々木宏幹編『アジア漢文化受容の民俗宗教に関する宗教人類学的研究』科学研究所費補助金報告書、二〇〇一、稲福みき子「韓国全羅道・済州島の占い師たち」沖縄・韓国比較社会研究会編『韓国と沖縄の社会と文化』第一書房、二〇〇一)、さらには忠清南道洪

城の降神巫に関する先行報告(崔雲植「충남 홍성 지역 보살과 법사의 성격과 실상」『韓国巫俗学』第四集)から得られた憑依霊の事例を検討しながら、韓国降神巫の地域的様相についての考察を試みたものである。

本発表では、憑依霊として語られる降神巫と血縁・姻戚関係にある死者の考察を通じて、韓国の降神巫の地域的様相を、次のような三つのグループに整理することができるのではないかと考えた。

第一には、主として自分から見えて三代前までの、極めて身近な直系尊属の死者を憑依霊として語る降神巫のグループを指摘することができ、地域的には忠清南道、忠清北道が、そのような降神巫の分布する代表的な地域として指摘できる可能性があると思われる。

第二には、自分から見えて三代前までの、極めて身近な直系尊属の死者だけでなく、三代前までの傍系の死者や、子供など自分よりも下の世代の死者も憑依霊として語る降神巫のグループを指摘することができる。本発表の考察からは、全羅南道の珍島や光州の降神巫が、このグループに該当すると思われる。

ソウルの降神巫も、三代前までの直系尊属の死者だけでなく、傍系の死者や自分よりも下の世代に属する死者も憑依霊として語るが、ソウルの降神巫が語る憑依霊としての死者の様相には、第二のグループに該当させた全羅南道の珍島や光州の降神巫のそれとは異なる点が指摘できる。すなわち珍島や光州の降神巫では、父母の世代やそれより上の世代に属する傍系の死者も憑依霊として語られるのに対して、ソウルの降神巫が憑依

霊として語る傍系の死者は、自分の世代以下の者に限られている。また、珍島や光州の降神巫が憑依霊として語るのは三代前までの死者であるのに対して、ソウルの降神巫は三代前までの死者だけでなく、五代前、七代前、十代前など、幾世代も遡った死者も憑依霊として語っている。そして、多様な傍系の死者も憑依霊として語る珍島や光州の降神巫では、自分との続柄が具体的に明らかな死者が憑依霊とされている一方、幾世代も遡った死者も憑依霊として語るソウルの降神巫では、憑依霊との具体的な続柄よりも、憑依霊としての死者の世代数に関心が置かれていると考えられる。憑依霊としての死者に以上のような特色が指摘できるソウルの降神巫を、さらに第三のグループとして分類できると思われる。

送葬における遺品と貨幣

——唱衣法の考察から——

金子 奈央

禅宗清規に記載される唱衣法——住持や僧侶の遺品を競売にかける儀礼——については、主として『勅修百丈清規』（以下『勅規』と略す）を対象にその教義的・経済的意義について考察をまとめたことがある（金子奈央「『勅修百丈清規』における唱衣法の意義——遺品の動きを中心に——」『東アジア仏教研究』第九号、二〇一一年）が、唱衣は一連の葬送儀礼の中で行われることから、本発表では主として『勅規』に記される葬送儀礼の文脈から唱衣に光を当て、唱衣における遺品と貨幣という要素

について宗教学的側面から考察することを目的とする。

『勅規』に記載される葬送儀礼は二重葬の特徴をそなえている。二重葬においては、まず一次葬（腐敗する肉体の共同体からの分離と骨化）は時間に支配される個人と死の持つ汚染力と関わり、二次葬は死者の役割の転換と伝統的権威の土台としての秩序の再創出といった再生と関わりと指摘される。唱衣は住持や僧侶の遺体が適切に処理された後（火葬の際は骨化した後、土葬の際は入塔・撒土以後）——一次葬の完了後、二次葬の開始以前というタイミング——に行われ、『勅規』によれば叢林の構成員は死去した住持・僧侶の遺体処理や骨化が完了した事を確認していると考えられる。

一方、『勅規』の記述からは、競売される遺品は死者の日用品が中心となることが想定できる。死者の日用品は身体性に代わる実体による「隠喩的表象」として、死者の実在性の保証となるという指摘がある。加えてこうした日用品は遺骨や位牌とは異なり正式な落ち着き先があるわけではなく、死の表象としてのこうした遺品が、共同体秩序が回復される二次葬完了後に共同体に取り残される危険性があると考えられる。上記の唱衣実施のタイミング——一次葬完了後、二次葬の開始以前——を考慮すれば、唱衣とはこうした行き場のない遺品を「商品」へと変換させて処理する機能を持つと考えられる。

唱衣には三者——死者・大衆（唱衣に参加する生者）・役職者（叢林権威の代理者）——が関わる。唱衣において競売される遺品が死者の生前に封印される事、唱衣が送葬の流れにおいて一次葬と二次葬との狭間に実施される事、「死の実在」を象徴す